



TITLE:

資本主義的生産＝生活様式の過去
・現在・未来 一尾崎芳治著『経済
学と歴史変革』によせて一

AUTHOR(S):

本多, 三郎

CITATION:

本多, 三郎. 資本主義的生産＝生活様式の過去・現在・未来 一尾崎芳治
著『経済学と歴史変革』によせて一. 調査と研究: 経済論叢別冊 1992,
3: 48-70

ISSUE DATE:

1992-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/44371>

RIGHT:

資本主義的生産＝生活様式の過去・現在・未来

—尾崎芳治著『経済学と歴史変革』によせて—

本 多 三 郎

はじめに

——おくれた国の革命とすすんだ国の革命——

天安門事件，ベルリンの壁の崩壊から東ドイツの解体・東西ドイツの統一，東欧諸国の社会主義体制の瓦解，ソ連の社会主義と連邦の解体の危機。ロシア革命は，中国革命は，東欧諸革命は一体何であったのか，20世紀の世界史に巨大なインパクトを与えた社会主義・共産主義はそもそも何であったのか，こうした問題を，自らの思想的営みの過去・現在・未来に深く関わるものとして，考察することをせま一連の事態が眼前に展開している。スターリンと彼の名が冠せられた集権的社会主義体制なるものに，挙げてその「罪」を着せる議論がこれまで以上に盛行している。レーニンの「誤り」，いやマルクスやエンゲルスにまで累がおよぼされ，かれらはいよいよもって卑しめられ，軽く捨て去られたりしている。

こんな時，尾崎芳治さんの『経済学と歴史変革』が世にだされた。「未来社会の運動態とその諸契機とについての概念的表象もなしにあてもなくなにごとかを『建設』しようとするほど，傷ましくも空しい営為はない」(p. IV. 本書よりの引用は以下同様に頁数のみを記す)。この「まえがき」の言葉は，眼前に展開する歴史的事態に驚き，時にうろたえる私たちに，本書が「好ましい討論」を呼びかけていることを語っている。それはまた，ハンガリー事件，チェコスロバキア事件（プラハの春），中国文化大革命等々，今日の事態を予兆する一連の諸

事件と，それらと密接に関わった日本の政治的・思想的状況との格闘のなかで，著者が獲得してきた理論的思想的確信を示す言葉である。

実際，本書の読者は，著者にあっては，今や崩壊し，あるいはその瀬戸際においつめられている20世紀社会主義国が抱える問題と，資本主義の発達した国々の抱える問題が，矛盾する同一の線上においてとらえられていることが了解されよう。

「ロシア革命は，はじめるのはたやすかったが，その後の前進をするのはむずかしいということをおぼすのなら，それは最大の錯覚であり，最大の誤りであろう。」「ヨーロッパの革命にとっては，はじめるのははるかに困難であるだろう。われわれは，ヨーロッパ革命をおさえつけている制度に最初の突破口をあけることは，それにとってはるかに困難であることを知っている。ヨーロッパ革命については，革命の第二および第三の段階へ突入することは，それよりずっと容易であろう。」

（レーニン「第4回臨時全ロシア・ソヴェト大会」大月書店版『レーニン全集』27巻 pp. 176-7. 本書 pp. 109-10）

これは，1918年3月，ヨーロッパにおける第一次大戦で疲弊するロシアの，好運な諸条件が重なって成就した革命直後の混乱に直面するレーニンの言葉である。切望するヨーロッパの革命がいまだ始まらず，ドイツ軍の攻撃の前に革命ロシアの滅亡の危機が切迫するなかで，領土の一部割譲を余儀なくされる，ドイツとの屈辱的な講和（ブレスト・リトフスク講和条約）

の締結をあえて説得しなければならなかったレーニンの言葉である。「腐りきった、おくれた政治制度」に一撃を加えることは容易であったが、その同じ「腐りきった、おくれた政治制度をもって事をはじめなければならなかった」がゆえに、第二、第三の「その後の前進をするのがむずかしい」おくれたロシア（同上 p. 176）。住民の「最後の一人まで民主主義的文化と組織性があたえられている」がために、「準備もなしに革命をはじめめることは、まちがいであり、ばかげて」（「ロシア共産党（ボ）第七回大会」同上 p. 94）いて、「最初の突破口をあけること」が「はるかに困難で」ありながら、ひとたびそれを突破すれば、「革命の第二および第三の段階に突入することは、それよりずっと容易で」ある、資本主義の発達した先進ヨーロッパ（同上 pp. 176－7）。レーニンのこの一対の命題にたいする理論的解答を、著者は、21世紀を目前にする現在の歴史的現実を視野におさめながら追究している。1973年に発表された論文「現代革命とイデオロギー」（本書では「歴史変革と生活意識」と改題）をはじめとして、このたび書き下ろされた長大な論文『『資本主義時代の成果』としての『協業と共同占有』および社会的生産＝生活過程の《人間化》と『個人的所有』』を含む4篇の論文からなる第二部が直接それに関わったものである。

第二部を一読して、レーニンの命題の後段、すなわち、資本主義の発達した国の革命にかかわる命題に直接答えていることがわかる。だが、ロシアのようなおくれた国の革命に関する前段の命題にも答えられている。この点についてのみ今、簡単に触れておきたい。

資本主義的生産様式の発展、とりわけ大工業の発展は、「潜勢的事実」ではあるが、未来社会の「事実的」主体、すなわち「結合された全体労働者または社会的労働体」を形成する。だが、この「事実的主体」の「現実的主体」への転化、その転化の第一歩を印す資本主義的取得・所有様式の変革＝政治変革は、それ自体がもっとも重要な歴史変革の内容であるが、たい

へん困難な課題の遂行を不可欠の条件とする。人間変革（所有意識や組織意識をはじめとする生活意識の変革）が部分的に先取りとして遂行されること、かつ、それが政治変革＝革命において大量的に一挙的に遂行されることがそれである。つまり、資本主義的生産＝生活過程が絶えず生み出す、「偶然的個人」、すなわち、団結に背を向け、「階級としての労働者」を解体する、競争する「ブルジョア的個人」としての「観念・表象・意識」の批判・超克と、「自由の主体としての個人」＝「自由な社会的個人」への「労働する諸個人」自身による転換である。

これが著者の、レーニンの後段の命題、すなわち、資本主義の発達した国の革命が最初の突破口をあけることの困難についての解答の要約であるが、それは、ちょうど逆さまにすれば、そっくり前段の命題にたいする解答ともなる。つまり、ロシアでは、まさにこの主体の「事実的」形成それ自体が、資本主義の発達した西ヨーロッパのような「先進国」と比較して、極めてか弱く、しかもそれさえもが、帝国主義戦争、内戦、干渉戦争によって決定的なまでに解体されていたのであった。レーニンが直面した課題は、まさにこの主体の欠如といってよい状況のもとで、革命ロシアに大海として存在する小ブルジョアとしての農民大衆の自然発生的分散性と、そこから日々発芽する資本との、闘争・競争・説得なのであった。

ロシアのようなおくれた国の革命にあっても、資本主義の発達した国の革命にあっても、いずれにおいてもその鍵は、大工業の発展と「結合された全体労働者」の形成にある、これが著者の確信である。

I 全体の構成・対象・主体・視点と体系性

本書は、頁数にして全体の半分近くを占める未公表の書き下ろし論文2篇をはじめとして、1960年頃より今日まで執筆されてきたものから、本書の主題に関わる10篇を選び、次の三部構成にまとめられたものである。

i 資本の創成

- ii 資本主義的生産＝生活過程と未来社会
- iii 近代的土地所有の歴史理論

全篇を通読してまず印象づけられるのは、およそ30年にわたって執筆されてきた10篇の論文が、それぞれ独自の意義をもって輝いているとともに、ある体系性を帯びてせまってくることである。それはなにゆえであろうか。

全三部を通じて表象に浮かべられているのは、総体性における資本関係、すなわち、資本・土地所有・賃労働の三者の総体性にまで発展した相互規定的関係である。この総体性における資本関係が、歴史的にどこから、どのようにして創成されてきたのか、これが第一部の第一論文「資本・土地所有・賃労働——『本源的蓄積』の理解によせて——」で明らかにされ、その資本関係の日常的「創成」についてが、同じ第一部の第二論文「貨幣の資本への転化——『論理＝歴史』説を超えて——」で明らかにされている。

レーニンの問題提起に関わってすでに触れた第二部はどうか。歴史的に生まれ出で、日常的に繰り返し「創成」される、資本・土地所有・賃労働の相互規定的者関係が、どのような矛盾する諸契機の総体として、つまり運動体として、どのように絶えず再生産＝維持されながら、どこに向かっていくのか、したがってまた、そこに形成されてくる歴史変革の諸条件・諸契機はどのようなものか、つまり、変革の客体と主体は何で、その変革のあり方はいかなるものか、これらがまず明らかにされている。ついでこの変革を経た未来社会が、どのような諸契機からなるどんな運動態として概念できるか、ぎりぎりのところまで追究されている。

では第三部はどうか。このたびはじめて活字化された第一論文「ブルジョア的土地変革の理論」を含めていづれの論文も、1960年代に、大塚史学への「内在と批判」から直接に生み出されたものである。30年近く経た今、これらの論文が本書の第三部としてまとめて収録され、珠玉の小論「歴史科学における『体系』について——『大塚久雄著作ノート』によせて——」が「導入にかえて」と題して本書の冒頭に飾られてい

る。著者は、大塚さんのすぐれて歴史理論的な「巨きな峰」と、それに連なる大小の山々からなる「類型論的比較経済史」体系への、今にいたるも最も深い理解者であり、真正面からそれを踏破し超克しようとしている。(pp. IV, 3)

だが今、これらの作品が本書において第一部と第二部に続けて配置されてみると、新たな光を帯びて輝いてくる。ここでは次の一点のみを指摘しておきたい。資本関係が社会の全生活部面を占領して総体性にまで発展するということは、とりまなおさず小経営の牙城ともいってよい農業部面を支配しなければならない。この農業部面を資本が全部的に占領していく過程を、それによって押しつけられる土地所有のあり方の変革過程において解明されている。つまり、資本・土地所有・賃労働の三者の相互規定的関係の総体性への発展過程の、土地所有の近代的土地所有への転成過程（農業における三分割制、さらに「資本による私的土地所有の否定＝土地国有」までのそれ）としての解明、これである。

およそ30年間にわたって執筆されてきた10篇の論文を三部構成に編んだ本書に、みごとにまでの体系性をあたえているのはなにか、あえて結論風にいうならこうなろう。総体性における資本・土地所有・賃労働の相互規定的関係が、全篇を通じて表象に、したがって対象として、あるいは主体として、浮かべられていて、そのいわば生成・発展・消滅の過程が追求されていること、これが第一。しかもその先の未来社会が、総体性における資本関係の発展のうちに形成・準備される客体的・主体的諸契機、もっともそれらは「潜勢的」なものであって、したがって革命により「現実的」なものに転化されたその運動態として、理論が許すぎりぎりの範囲にまで提示されていること。そのことにより、対象・主体である資本主義的生産＝生活様式が、その過去・現在・未来において首尾よく一貫して描かれているからである。これが第二。

その際、視点は、「生きて意識をもって活動している具体的な諸個人」としての、「人間の

生きざま」にすえられている。諸個人の普通の「生活意識」が、かれらの「観念・表象・意識」が、物質的生産＝生活過程にその客観的基礎をもつものとして、また過程を媒介するものとして組み込まれている。したがって本書の対象・主体は、諸個人の「観念・表象・意識の生産過程」をも含めた、「人間の物質的・精神的生活の仕方・様式」の総体であり、つまり、「生きている諸個人としての人間の生きざま」の過去・現在・未来なのである。しかも、普通の「生活意識」の先取りの転換を前提とし、その大量的・一挙的転換＝人間変革を不可欠のものとして伴う、諸個人とかれらからなる集団・組織の能動的行為＝革命とその諸契機、ここにこそ焦点があてられている。これが、本書の叙述に、人々の息づかいが伝わってくるほどまでのふくらみとともに、体系性を与えている第三の、もっとも重要なものである。(pp. Ⅲ, Ⅳ－Ⅶ, 163－4, 175, 241－2)

Ⅱ ブルジョア的土地変革の理論と農民解放の意義

——類型論的比較経済学史＝
大塚史学を超克して——

著者は「まえがき」でこう述べている。「わたしは、研究生生活を一つの前提をもってはじめた。大塚久雄さんの類型論的比較経済史とでもいうべきあのすぐれて歴史理論的な『体系』への内在と批判とである」と。1961年秋の土地制度史学会大会のシンポジウムにおいて、山之内靖氏ら東京大学のグループと本書著者・武暢夫氏・松村幸一氏のグループとのあいだで、「イギリス革命における土地問題」と各国資本主義の類型論的把握をめぐる、激しい論争がおこなわれたこと、読者のうちに記憶されている方もおられよう（この論争については本書末尾に収録された「農業進化の『二つの道』」いわゆる『各国資本主義の類型』～土地制度史学会報告によせて～）を参照されたい）。尾崎さんたちは、「イギリス革命の土地変革を『地主的土地改革』と規定し」て、大塚史学「体系への最

初の挑戦」をおこなったのであるが、「それはただちに、『地主的土地改革』と三分割制の確立との連繫をふくめて、首尾一貫したブルジョア的土地変革の理論の構築をこころみること」を、「義務」として要請されることとなった(pp. Ⅳ－Ⅴ)。

この「義務」を果たしたのが、すでにその内容の一部にふれた、このたびはじめて活字化された第三部第一論文「ブルジョア的土地変革の理論」である。本論文は、1961年に、著者が刊行を予定していた『イギリス革命の土地変革』の序章としてまず執筆され、1963年に大幅に加筆されたのちに、さらに一部手を加えられたものである。その概要と意義はこうである。

はじめての試みとして、ブルジョア的土地変革の首尾一貫した理論が構築されたこと、これが第一の意義である。資本関係が農業の全部面を占領していく過程が土地所有に押しつけるその性格の変革過程を、四つの発展的諸契機に整序されている。すなわち、第一の、前提となる契機として、農民による土地の私的占取の前進・強化、その極限に位置する「自由な農民的土地所有の形成」。第二の契機として、「農民的土地所有または土地占有の否定としての資本主義的大土地所有の形成と確立」。第三は、「土地所有と経営との分離によるいっさいの資本主義的私的諸土地所有の、厳密な意味での近代的土地所有への転化」。最終の契機として、「資本による私的 land 所有の否定＝土地国有」。これらがそれである。(pp. 335－65) これら四つの契機はいずれもこれまでバラバラに指摘されてきた。だが、これらが一連の発展的諸契機として理論的に整序、すなわち発展法則として解明されたのは、本論文においてはじめてである。これを前提することにより、第一次ロシア革命の理論的所産であるレーニンの、農業におけるブルジョア進化の「二つの道」論がもつ、特殊ロシアの具体的内容を正確に確認し、したがってまた、それがもつ一般的・普遍の内容を抉りだし、もって封建的農業構造から資本主義的農業構造へというより一段具体的な移行理論が、「二つ

の道」論を組み込んで構築されている。(pp. 366-402. 「レーニンの『二つの道』理論とイギリス革命の土地変革」本書 pp. 403-31)

ではこうした理論構築は、大塚史学＝類型論的比較経済史体系を、あるいはこの体系の批判者のうちにもみられる誤謬を超克するうえで、いかなる意味をもつのであろう。第二の意義としてのこの点を、核心部分に位置する「二つの道」論にかぎってみることにする。

まずは著者がとらえた、大塚さんの「発展法則」と「二つの途（道）」を明らかにしておくのがよい。「前近代社会の基礎としての集团的諸関係（共同体）の内部への、それを解体させつつ進む社会的分業の浸透一局地的市場圏の成立、その担い手たる経済主体としての中産的生者層の全般的形成、そして価値法則によるその分解の結果としての産業資本の生成」。これが大塚さんの「発展法則」であるが、この「関係の歴史的形成こそが、大塚さん流に言えば、西ヨーロッパなかんずくイギリスに典型的に展開をみた近代社会＝産業資本主義を、自生的に生みだしたパン種であり、近代化の『起点』であった」。つまり「さきの発展法則は、それ自体が、一連の客観的・主体的諸要素からなる歴史的因果連関の『理念型』と解され、これを『批判的比較』の基準として、各国資本主義の『発達経路』にかんする周知の対抗的な基本的二類型の『理念型』が、『構成』されることにもなったのである。すなわち、『下から』の『自生的な』『小生産者の発達の経路』（西ヨーロッパ的『近代市民社会』の形成）と、『上から』『外から』の『旧土地所有・前期的資本の転成の経路』（東ヨーロッパ・日本的擬似『近代』の現出）との二経路である」。これが大塚さんの「二つの途（道）」である。(pp. 5-6)

著者は、これは「すばらしく首尾一貫した発展法則」と、それを前提とした「類型論的比較経済史とでもいうべき」「すぐれて歴史理論的な体系」、しかも、「歴史の形成主体」としての「人間」と「倫理」＝「思想」を組み込んだ「体系」である、と評価する一方、この「体

系」を色濃く特徴づけている「二項対立的類型」の、すなわち「西ヨーロッパ的『真正』近代とそれに対極的な擬似『近代』」との「理念型構成」に、「重大な問題」がはらまれていると批判している。ここにレーニンの「二つの道」が関わってくるのである。(pp. 6-9)

著者は、大塚史学の「二つの道」論はつまるところこうなると批判している。農民層が両極分解し、かれらのうちより産業資本が生まれる「下からの道」か、それともそれと対抗的に地主による「上からの道」か。農民経済のブルジョア化の道か、領主経済の「ブルジョア化」の道か。この対抗的な「二つの道」にあって、前者の道こそ厳密な意味での、あの西ヨーロッパ、とりわけイギリスに個性的な近代資本主義を生み落とす、「自生的」な「小生産者の発達経路」である。これにたいして後者の道は、擬似「近代」を生み出すのであって、実は資本主義化しない道となる。結局のところ「ブルジョア型」か「地主型」かということになる、と。(pp. 380-3, 394, 399, 403-31. 「農民進化の『二つの道』』といわゆる『各国資本主義の類型』」本書 pp. 458-63)

これにたいして、著者がとらえたレーニンの「二つの道」論と、そこに含まれるブルジョアの土地変革の理論の一般的・普遍的内容は以下のものである。

レーニンのいう「地主的な道」であれ「農民の道」であれ、いずれにおいても農民層分解が基礎的過程なのであって、この過程が実際に進行しないかぎり、どんな道であれ資本主義は発展しない。「農民層分解の道」か「地主的な道」か、というのではない。「二つの道」における新たな矛盾とは、領主経済が農民層分解の進行に規定されてブルジョア化を遂げていく、したがって領主経済と農民経済との全体がブルジョア化を遂げていく「自然的な道」＝「地主的な道」か、あるいは、領主経済を一挙的に廃絶して農民経済のブルジョア化が自由に進行する「農民の道」かである。それであるがゆえに、「二つの道」における矛盾の特殊性は経過

的性格にあって、「農民的な道」はいつでもどこでも歴史的な現実の課題として日程にのぼるのではない。なぜか。農民層分解がはるかな程度に進行し、したがって農民層の一つの階級としての存在をはるかな程度に解体し、それに規定されて領主経済もほとんどすっかりブルジョア化してしまっておれば、「農民的な道」の客観的な条件も、主体的な条件もなくなってしまうからである。「農民的な道」は、農民層分解が一定程度、すなわち、旧土地所有がそれまでの立脚基盤の解体につれて、新しい立脚基盤＝ブルジョアの基盤へ移行することを開始するほどまでに進行しているが、農民をして一つの階級として土地闘争にむかうことができなくするほどにまで、進行していない段階での、領主経済・領主的土地所有の一挙の廃絶を実現する政治変革＝「農民革命の道」なのである。（特に、pp. 371, 374－80, 390－93, 401）

ここにこそ「農民的な道」の意義があり、それは「地主的な道」と同じく農業におけるブルジョアの進化の道であっても、その過程に類型決定的意義もまた有している。すなわち、自然成長的移行過程である「地主的な道」は、「農民にとってよりながい封建的搾取の随伴によって加重されたもっとも苦しい収奪の過程」であり、それにたいして、「農民的な道」は、「旧い搾取の一掃によって商品経済のもとで可能な最大限の程度で農民の福祉を保証しつつ進行する急速な過程」である。（pp. 378－81, 384）

著者は大塚さんのうちにある農民解放の見地を正当に継承されている。著者はまた、大塚さんにたいして、「閉ざされた近代主義ではないが、いわば開かれた『真正近代』主義とでもいうべき抽象性」をもつとして批判しつつも、この開かれた見地のいわば延長上に、「近代（資本主義的世界）を止揚するためには近代が必要」、すなわち「世界史的に成熟した資本主義と、自由な階級闘争の必須の条件としての民主主義とが必要」であると主張する。「近代がまだ決して最終的解放でないというその限界を知ると同時に」、具体的諸条件がととのい、「二つ

の道」の選択が現実的な歴史的課題として日程にのぼされる時、「農民的な道」を可能な限り最大限に実現すること＝農民革命のもつ意義が、「商品経済のもと」という限界内ではあるが、「最大限の程度で農民」に「福祉を保証」する点に、また「最終的解放」にむけての、資本主義のより急速な発展と「自由な階級闘争の必須の条件」の最大限の獲得という点にもめられている。尾崎さんがつかんだレーニンの「二つの道」論のもっとも重要な核心は、「階級闘争の理論」としての意義なのである。だからこそ、旧土地所有から「自由な農民的土地所有」の最大限の程度での成立は、政治変革＝土地革命を不可欠とする一方、農業構造のブルジョアの進化にとって「かならずしも必要条件ではない」こと。したがってまた、農民にとって「もっとも苦しい収奪の過程」である「地主的な道」であっても、農民層分解を基礎過程とする農業のブルジョアの進化が進行し、資本蓄積が進行するかぎり、「到達点は、三分割制である」こと。これがブルジョアの土地変革の四つの契機の「発展の法則の見地」から明らかにされたのである。（pp. 8－9, 341, 381－3, 387, 390－7, 402）

「自由な農民的土地所有」＝「自由な独立自営農民層」の全般的成立を、厳密な意味での「近代資本主義」形成の不可欠な通過点とし、あの「二項対立的な資本主義類型」を決定する鍵であるとする大塚さんの巨きな峰が、著者によって理論的に思想的に踏破された。

進んだヨーロッパや合衆国と遅れた日本、さらに遅れたアジア、これが近代日本の思想史を貫く背骨となった歴史観・世界観であった。大塚さんはこの中に生まれた「最良の知性」であり、「最良のジャパニーズ・イデオロギー」である。巨峰を踏み越えた尾崎さんが大塚さんに呈した言葉である。（1990. 6. 2経済史研究会・赤土会共催「研究集会」での著者発言）

Ⅲ 仮象としての「自由・平等・所有」

——市民主義的経済学批判——

著者は執拗なまでにいわゆる市民主義的マルクス理解や市民社会論の社会主義論を批判している。なぜか。それらが「最良のジャパニーズ・イデオロギー」である大塚さんの歴史理論を前提して、したがって近代日本思想史の深みに根をもっているからである。またそれらは、「生きて意識をもって活動している具体的な諸個人」が、みずからの「最終的解放」にとってどうしても批判＝超克しなければならない普通の日常意識の理論化であり、あるいはそこに共鳴基盤をもっているからである。

著者がとらえた大塚さんの「発展法則」はすでにみた。それは、「マルクスの『資本論』における経済学的諸範疇を、経済学の方法にかなする独自の理解を媒介にして、発展法則として読みかえ運用」したものであり、とりわけ、第一部の第一篇「商品と貨幣」、第二編「貨幣の資本への転化」、ならびに第七篇第24・25章の本源の蓄積章の理解にかかわっている。(p. 5)

大塚史学にあっては、出発点是小商品生産者の世界である。しかもそれは、あの「独立自営農民層」を「培養器」とする「中産的生産者層」の、「勤労・儉約・蓄積・徳義」の内面的「倫理」につきうごされる「自由で平等な」競争世界である。この競争世界のなかで胚芽利潤の獲得により「資本として投下されうる貨幣」が蓄積され、他方、「土地およびその他の生産手段を喪失し、賃銀労働者として働くよりほかに生活の道のないような貧しい人々」が創出される。つまり「産業資本の原始的形成」であり、近代プロレタリアートの形成である。これを媒介するものが本源の蓄積であって、それは「経済外的強制の局面」＝暴力を伴うものではあるが、「基礎的な局面」はあくまで「経済的な局面」なのであって、「価値法則」による「中産的生産者層」の「両極分解」がそれである。すなわち「社会的価値」と「個別的価値」の乖離による「貧富の分化」＝「両極分解」である。

(pp. 34-5. 『大塚久雄著作集』第4巻 pp. 31-46, 第5巻 pp. 160-9)

みられるように、ここでは『資本論』第一部第一篇は小商品生産者の世界となり、かれらのうちより資本が生まれるのが「貨幣の資本への転化」(第二篇)であって、この「転化」を媒介するのが「価値法則」による小商品生産者の両極分解、つまり「本源の蓄積」(第七篇第24章)となる。こうした『資本論』理解は、大塚さんにかぎらず、いや大塚さんの影響を受けて、日本におけるマルクス研究にひろくみられるのである。こうしたマルクス理解こそ、著者が格闘してきたものの一つであり、しかもそれは、「生きて労働する諸個人」の「普通の日常意識」と結びつくものであるがゆえになおさら執拗に追求してきたのである。この点を本書第一部を中心にみることにする。(pp. 34-43)

著者のみる第一篇の世界は、資本主義的商品に表現される人と人との世界である。したがってそこには労働力商品もまた含まれている。つまり総体性における資本・土地所有・賃労働の三者の相互関係の世界が表象に浮かべられている。したがってそこには本源の蓄積が前提されていることとなる。もっとも、資本関係の歴史的創成である本源の蓄積は、資本の生産過程の展開に先立って叙述されてよいようにみえるが、マルクスの方法によれば資本の運動法則の解明が果たされた後にはじめて積極的な意味をもって叙述されなければならないものである。こうした第一篇に描かれた世界の核心は、社会の労働総体が対立する私的労働の諸環に分割された世界、すなわち私的所有と自然発生的社会的分業の世界であり、孤立して闘争する「偶然的個人」の世界である。マルクスが追求する諸個人の解放は、まさにこの「偶然的個人」の「自由の主体としての個人＝自由な社会的個人」への転換においてこそにあるのである。だが市民主義的マルクス理解にあっては、超克すべきこの「偶然的個人」の世界のうちにみられる「仮象としての自由・平等」が実体あるものとしてとらまえられ、そこに市民社会なるものが見つけ

だされ、あるいはこのうえに市民社会論的社会主義が接木されるのである。(pp. 14-5, 18-9, 30, 111-5, 139-41, 162-4)

では第二篇「貨幣の資本への転化」はなにか。まず資本の歴史的創成ではない。大塚さんたちのいう小商品生産者の「価値法則」による「両極分解」をつうじた「産業資本の原始的形成」でもなく、宇野さんがいう「商人資本の産業資本への転化」でもない。商品流通の世界のなかで「なぜ、どのようにして、なにによって貨幣は資本に転化するか」、つまり「資本の日常的創成」である。資本はたえず流通部面に貨幣の姿をとって登場し、貨幣所持者として労働力商品所持者と相対し、価値どおりの交換をすることによって、運動を開始する。なぜ労働力商品が存在するか。ここでいわゆる「二重の意味での自由な労働者」が問題となるが、著者はここに、市民主義的マルクス理解に落ち込んでしまう分岐点の一つがあると同時に、マルクスの核心もまた横たわっているとみている。(pp. 71-80, 104)

著者は、マルクスのいう第一の意味＝「自由な人としての自分の労働力を商品として処分できるという意味」での「自由」の内容はこうであるとしている。「商品としての労働力の自由な所有」であって、「みずからの労働力の実現を含む労働者による労働力の自由な所有」ではない。「したがってそこでの人格的自由の規定は、労働力を實現するうえでの処分権をもたず、ただ商品として販売するうえでの処分権をもつかぎりでの自由、すなわち商品所持者・販売者としての自由、に限定されている」と。そして著者はマルクスが付した重要な前提、すなわち「商品交換は、それ自体としては、それ自身の性質から生ずるもののほかにはどんな従属関係も含んではいない」という前提に注目する。(pp. 97-8, 116, 141-4, 164, 226, 314)

労働力商品の交換にあっても、その部面をみるかぎりにおいては、商品交換一般と同様に、労働力商品所持者と貨幣所持者は「互いに対等・自由な私的所有権者」として承認しあわねば

ならない。だが他面では労働力商品も他の商品一般と同様に、「いったん売り渡されれば、その消費は買い手の自由によだねられる」。「しかも労働力は、ほかの商品とちがって『生きている人格のうちに存在』する。労働者はもちろん『労働力を手放してもそれにたいする自分の所有権を放棄しない』が、だからといって、かれが売り渡した期間彼の労働力をかれの人格から分離できるわけではない。労働力の消費は労働であり、労働は買い手たる貨幣所持者のものとなる。したがって、労働力の売買が終わったあとでは、貨幣所持者は、自分のものとなった他人の労働にたいする所定の期間の処分権すなわち専制的指揮権を取得し、労働力所持者は、当該の期間、資本家の意志・資本の専制への隷属下で労働することを強制される。」「『従属関係を含まない』商品交換を介しての、商品交換『それ自身の性質から生じる』従属関係の形成である。」これが、著者が注目するマルクスの「前提」の「重大な意味」の二側面であるが、市民的マルクス理解にあってはすっかり抜け落ちてしまい、「専制的労働指揮権」としての資本とそのもとでの「強制労働」、つまり「賃金奴隷」の世界が、「仮象」にすぎない「流通表面の自由・平等」の彼方に消え去ってしまうのである。(pp. 98-9, 117-8, 143, 164, 166-7, 226-7)

「労働者による労働力の『自由な』所有は、商品＝私的所有の形式に包摂されることによって所有の内容を奪われて空疎な形骸いわばカッコつきの『所有』と化している」。では「所有のこの内容剝奪を必然化した条件は何か」、これを問うことは、「もちろんなぜ労働力が商品となれるかではなくならざるをえないかを問うこと」であり、「この労働力の商品化にとってのマルクスのいわゆる『本質的な条件』を示すのが」、第二の意味での「自由」である。つまり、「自分の労働力の実現のために必要なすべての物」の無所有、すなわち生産手段だけでなく、生活手段さらには「自分の労働の対象化」たる労働生産物の無所有である。だがここでも

やはり従来の通例のマルクス理解の多くにあっては、生産手段だけの指摘にとどまっているばかりでなく、マルクスの「本質的な条件」の意味するところも看過されてしまうのである。(pp. 100, 144)

著者がかくも第二篇の「二重の自由」に着目するのは、ここに、「労働力と、生産手段および生活手段と、労働生産物との、これらの所有および取得における内的な関連の骨格が示されて」おり、同時にまた「引き裂かれたこの関連を、したがってまた労働する個人の労働力『所有』の奪われた内容を回復する条件したがってまたみずからの労働の生産物をわがものとする条件も、暗示されている」とみるからである。しかもすでに触れたように、ここが市民主義的マルクス理解の拠り所の一つとなっているからであり、そのうえに、普通の労働者の日常生活意識には、「仮象」にすぎない「流通表面の自由」が実体あるものとして実感されるからである。もっとも、「労働力の売買における『自由な人格』の相互関係」が「流通表面におけるたんなる『仮象』にすぎない」ことは、「資本の専制への隷属下」での「強制労働」の世界、著者のいう「顛倒された」世界で、労働者の普通の意識にも自覚されてくるのであるが、そこでもまたかれらはふたたび「ブルジョア社会の表面」に連れもどされるのである。この点は後論にて。(pp. 144, 147-8, 165, 177)

最後に、マルクスの本源的蓄積論の第24・25章はどうか。大塚さんなどが、あるいはまた市民主義的経済学がいう、小商品生産者(＝中産的生産者層)の自由な競争世界(第一篇)のうちより生まれてくる「産業資本」の「原始的形成」(第二篇)を媒介するものなのではない。したがって、「自由な小商品生産者の価値法則による分解と、それを通じての自己労働にもとづく蓄積結果の資本への転化」ではさらさらでない。そうではなく、マルクスの本源的蓄積論は、まさにこうした市民主義的経済学がいう、「資本家の所有の市民的合理化論」と、「資本形成史のブルジョアの牧歌説」の批判なのであ

る。(pp. 32-44)

「価値法則」による小生産者の「両極分解」について付言するなら、著者は大塚さんたちが「わが国での資本主義発展史研究に、小経営的生産者の両極分解の観点をはじめて本格的に持ち込んだ点」を高く評価する一方、それが上にみた「ブルジョアの牧歌説」にぴったりと重なっていることはいうまでもなく、また、そこでの「価値法則」が「『等価交換の法則』といった次元でだけとらえ」られていることから、「分解論とのかかわりで第一篇が含む重大な内容を見失うことにな」る、と批判している。つまり、「価値法則が生産者相互の無規律的な競争を通じてしか貫徹しない、という事実」が見失われていると。(pp. 34-5)

著者のとらえた本源的蓄積論のもう一つの重要な内容は、すでにみた資本・賃労働・土地所有の三者の相互規定的関係が総体性にまで形成される過程とする点であり、とりわけ、土地所有が資本関係の発展につれて近代的土地所有へと転成されていき、それ自体が資本関係の、したがって賃労働の社会的形成・存立の歴史的的前提条件であるとともに、逆に過程を能動的に前へ進めるということ、就中、それが賃労働をつくり出すということ、労働者を大地から引き離すうえで決定的な力として行使されるのが「土地所有の権能」であるという点である。(pp. 45-50, 55-6, 344-5, 358-9)

IV 「偶然的個人」と「結合された全体労働者」の「事實的」形成

生きて労働する諸個人の最終的解放と未来社会についての著者の積極的な理論と思想をあらためて追跡してみよう。膨大な書き下ろし論文「『資本主義時代の成果』としての『協業と共同占有』および社会的生産＝生活過程の《人間化》と『個人的所有』」をはじめとする本書第二部を中心にみることにする。

核心となる論点は多岐にわたっているが、あえて大筋をいえばこうなる。

著者はまず、資本主義社会における「人間の

生きざま」, すなわち「人間の物質的・精神的
生活」の「独自の仕方・様式」を批判している。
と同時にその同じ「生活の仕方・様式」のう
ちに形成されてくる, そのあり方自体を変革する
客体的・主体的諸契機を追求している。しかも
それらは未来社会の, したがって「根底的に転
換された新しい人間の新しい物質的・精神的生
活の仕方・様式」の諸契機を予示するものであ
ること, だがそれらは「事實的」に形成されて
はくが, いまだ「潜勢的」なものであって,
その「現実的」なものへの転化には「深淵」
＝革命がよこたわっていることを解明している。
そのうえで「自由な社会的個人」が主体となる
運動態としての未来社会を理論が示しうぎり
ぎりの範囲まで描いている。生きて活動する具
体的諸個人のあり方にそくしていえば, 「偶然
的個人」から「自由な社会的個人」への転換で
ある。以下この筋を追っていくことにするが,
ここではまず, 著者が明らかにする資本主義社
会の「労働する諸個人」の「生きざま」をみる
ことにしよう。なおその前に, 著者の重要な以
下の理論的前提, 視角あるいは視角の範囲とも
いってよいものについて確認しておきたい。

「生産」とは「生活の生産」であるというこ
とである。「人間の物質的生活の生産過程」は,
「一定の社会形態のもとでの」, 「直接的な物質
的生産過程」, 「分配または社会的補足としての
交通」, ならびに「本来的消費過程」の三契機
からなる, 「人間の生活の生産の総過程」であ
ること。しかもそれ自体が, 「人間の対自然お
よび相互間の諸関係」のなかで, 諸個人が労働
・取得・交通・消費において生きて活動する,
「現実的生活過程」の総体そのものであること。
さらにこの「人間の現実的生活過程」こそが,
人間が「対自然およびかれら相互の関係にかん
する諸観念・諸表象・意識を生産する過程」な
のであって, それゆえ, 「人間の物質的生活の
生産過程」は, 「諸観念・諸表象・意識の生産
過程」であるだけでなく, 「現実に一定の意識
や観念に媒介された物質的生活過程」でもあ
ること。これが第一。(pp. 184-6)

「消費」(本来的消費)は「生産」であるとい
うことである。だがこれは生産と消費との相
互関連のあらたなる地平(未来社会)での積極
的な規定であり, したがってその高みから, 資
本主義の現実＝「労働する諸個人」の「賤しめ
られた個人的消費」が透けてみえてくる。これ
が第二。(pp. 272-6)

「労働」とは「取得」であり「所有」であり,
さらには直接に「消費」である, ということだ
る。これもまたあらたなる地平での積極的規
定である。この視点から, 資本主義的生産＝生
活様式のもとでの労働主体と労働諸条件・労働
生産物との関わり方が批判されている。これが
第三。(pp. 270-7)

では, 資本主義社会において, 労働・取得・
交通・消費の総過程で生きて活動する諸個人の
現実の生活はどのようなものであるのか, また
そこではどのような諸観念・諸表象意識が生産
され, したがってまた, それらは過程を媒介す
るものとしてはどのようなものなのか。あるい
は, そこでの生産と消費との, また労働と取得,
所有, 消費との関連はどのようなものなのか。
著者が明らかにしている, 資本主義社会におけ
る「労働する諸個人」の現実の生活過程を追っ
てみることにしよう。

1 自由な労働力「所有」の仮象性と 「偶然的個人」

もう一度労働力の売買の場面からはじめる。
「労働する諸個人」はまずもって労働力商品の
所持者として市場に登場する。かれは自分の
「生活過程」をここから始めなければならない。
なぜか。労働力を売るほかには, したがって労
働力が売れないことには生きていくことができ
ないからである。かれとかれの家族には生きて
いく諸手段＝個人的消費手段がない。それらを
獲得する諸手段＝物的生産条件もない。もと
より, 「生きて活動する諸個人」そのものが人
的生産条件であり, 労働能力＝労働力は「生き
て活動する諸個人」に本源的にそなわった人間
自然力である。その意味ではかれは労働力を本

的に所有している。だがかれは労働力を実現するあらゆる諸条件から切り離されている。もちろん労働諸条件＝労働対象と労働手段からも切り離されている。したがってかれの身体自然にそなわった労働能力の「所有」は内実のない空疎なものである。かれはけっして自由な労働力所有者なのではない。かれの労働力の実現は労働力の買い手である資本のもとで現実のものとなり、したがってまたかれは資本のもとではじめて現実の労働者となる。かれの労働はかれのものでなく資本のものであり、かれの労働の生産物もちろん資本のものである。「労働する諸個人」は生活に必要なあらゆるもの、生活手段も生産手段も労働生産物も所有しておらず、また労働力の本源的所有もその内実においては無所有なのである。かれにないこうした諸手段・諸条件のすべては資本のものとなっているのである。だからかれは労働力商品所持者として市場にでかけなければならない、貨幣（賃金）と交換に労働力を売らなければならない。これがかなってはいじめてかれは、狭い範囲におしとどめられた生活手段にありつける手段＝貨幣を手にすることができる。もっとも賃金は労賃という形態をとり、かれが売り渡した労働力がその購買者＝資本家により消費された、すなわちかれが資本家の指揮のもとで労働したのちに、かれの労働にたいする支払いとして手にするのだが。またのちにみるように、かれが労賃という形態で受け取った貨幣で購入する生活手段＝個人的消費資料は、実はかれの労働によって生産されたものなのである。つまり自らの労働生産物の労賃形態をとる貨幣での買い戻しと、資本が支払ったはずの貨幣の資本家への還流なのであるが。(pp. 97-100, 117-8, 142-7, 226-8)

だが労働力の売買の部面は、ほかの商品交換一般と同じく、取引当事者が、「自由」意志にもとづき、「平等」な私的所有権者として認めあい、たがいの「所有」物を、利己にしたがって取引する、「自由・平等・所有・ベンサム」の「真の天賦人權の楽園」である。そこでは「労働する諸個人」も「自由な労働力所有者」

にみえてくる。かれもまた自分が「自由な人格のもちぬし」にみえてくる。だがそれは「流通表面の仮象」にすぎないのであって、かれが、かれの労働力を商品として購入した貨幣所持者＝資本家のあとにしたがってはいっていく、つぎの生活過程＝労働過程では自分がすこしも自由でなかったことがわかるのである。つまり「『従属関係を含まない』商品交換を介しての、商品交換『それ自身の性質から生じる』従属関係の形成である。」しかも労働力の売買の、自由と自立の形式におおわれた流通世界もその実、「私的所有と自然発生的社会的分業」のもとでの対立し闘争する孤立した「偶然的個人」の世界であって、諸個人の「社会的相互依存」がけっして「自由意志的」なものでなくて、ただ「物的な外的必然性」に「隷属」した「偶然的」なものにすぎない世界なのである。(pp. 109-10, 140-1, 162-3, 221-2, 264-6)

2 労働指揮権としての資本・強制労働・主客顛倒

人間の「労働は、かれらの生活の意識している欲望に対応して、合目的にみずからの自然力（労働力能）を制御しつつ、自然素材を変形させてそれに所期の形態を賦与する活動である。それゆえ労働は、自己を対象化する活動であり、自己を実現する活動であり、対象を取得する活動であって、人間の『生命の発現』であるとともに『生命の実証』でもある活動である。」他面で「労働は、人間がこの自己対象化・自己実現・対象取得の活動を遂行していくなかで、みずからの『自然〔人間自然〕のうちに眠っている潜勢力』を顕勢化していくことによって、自分自身の肉体的・精神的力能を変革し発展させる活動である。それゆえ労働は、人間の人間としての自己創造・自己発展の活動的契機である。」この労働を通じて「人間の『生命活動』の対自然の関係における意識的・実践的主体性」が二重に現われる。(p. 186)

だが「労働する諸個人」が自己の労働能力を商品として売らなければ生きていくことができ

ない資本主義社会の労働の世界はどのようなものか。かれが「従属関係を含まない」商品交換を介して入っていかなばならなかった、商品交換「それ自身の性質から生じる」従属関係の世界とはどのようなものか。

労働過程はそのものをみるかぎりにおいては労働者の労働能力の発現過程である。だがそれは資本の生産過程であり、資本による、資本が商品交換を介して手にしている労働力＝人的生産諸条件と、物的生産諸条件との消費過程である。労働は資本のものであり、労働生産物は資本のものである。「労働する諸個人」は、資本の意志に従い、資本の目的・構想・計画にそって自己の「自然力を制御しつつ、自然素材を变形させてそれに」、資本にとっての「所期の形態を賦与」しなければならない。「人間的労働に独自の労働にたいする『合目的的な意志』は、今や労働主体から離れて資本の意志として労働者に対立して現われる。」労働は、資本の意志に従った、資本によって強制された、資本のものとしての労働となり、資本はこの「労働にたいする指揮権」となる。(pp. 117, 145)

資本の生産過程は労働過程であるとともに、価値形成（増殖）過程でもある。資本の「直接的目的」あるいは「規定的動機」は可能なかぎり大きな剰余価値の獲得であって、自らのものとしての他人の労働力の消費において、必要労働を超えた不払労働としての剰余労働の強制に、資本の最大の関心がある。資本は「労働にたいする指揮権」であるだけでなく、「本質的には不払労働にたいする指揮権」であり、「剰余労働の強制権原」なのである。(pp. 118, 145, 228-9)

したがって資本の生産過程にあっては、労働主体と客体的生産＝生活諸条件との関係は「顛倒」したものとなる。生産手段は資本家にとっての「他人の労働を吸収するための手段」・「他人の労働および剰余労働にたいする強制力源」として、生活手段は資本家にとっての「人身を買う手段」として、労働者そのものは資本家にとっての「人間的搾取材料」として、現れ

る。つまり、「労働する主体たる労働者」の「客体化」と、「かれの労働の客体たる生産手段」・「かれの労働の対象化たる生産物」の「主体化」であり、「死んだ労働と生きている労働との、関係の逆転」である。(pp. 145, 229)

したがってまた、「労働する諸個人」が売り渡したかれの「労働の創造的な力」はいまでは「資本の力」にはかならないのであって、その実現＝労働はかれに「対立するもの」を生産する。すなわち、かれは「労働することにおいて」、「資本家の富、資本家の取得、資本の権力、資本の所有」を、つまり「資本そのものを生産」する。したがってまた、「そうすることによって、自分の労働生産物からの自分自身の疎外を、自分自身の資本家への隷属と資本家による搾取とを、したがって自分自身の貧困を、生産する。」この「逆転」「疎外」「主客顛倒」は資本主義的工場制度において「絶対的なもの」となる。(pp. 145, 152, 224-6, 230)

3 「結合された全体労働者」の「事实的」形成と現実の姿

「逆転」「疎外」「主客顛倒」は資本主義的工場制度において「絶対的なもの」となる。と同時になによりもこの過程の発展のうちにこそ、「資本主義的生産＝生活の仕方・様式」の変革と「未来社会」の主体的・客体的諸契機が準備される。

「大規模な協業と共同的生産手段とくに機械の使用に示される労働の社会的生産力」、この「資本の独自の生産力」の展開の場である「直接に社会化された労働過程」それ自体のうちに次のような諸契機が形成される。

① 機械の自動体系に示される巨大な共同的労働手段の共同利用、② 複数労働者の大規模な協業すなわち共同労働の遂行、③ 一箇の全体労働者の共同生産物としての労働生産物の生産、④ 個々人の労働の生産力の算術的合計を超える集团的労働の独自の生産力の発現、⑤ 大規模な共同労働に不可欠な労働の社会的管理に媒介された個々人の諸労働の全体的調和への

統合、⑥ この社会的管理機能の労働者の一定部分による分担、総じて、生産の「事實的」主体としての「結合された全体的労働者または社会的労働体」の「事實的」形成、これらがそれである。(pp. 121, 148-9, 169-72, 223)

こうした近代的大工業に独自の、労働手段のあり方、管理も含めたところの労働とその生産力のあり方およびその成果である労働生産物のあり方、したがってまた労働主体のあり方、そしてこれら相互の関係のあり方、あるいは個々の労働者と諸個人の結合体とのあり方、これらのうちに、変革の主体的・客体的諸契機が、また未来社会の形成要素がみてとれる。就中、「労働する諸個人なしに結合体はありえず」、しかも他方で「結合体の成員としての協働においてこそ諸個人はその個人的限界を超えた人間的能力を発揮することができる」という、「新しい——あの商品世界の諸個人のあり方とまったく次元を異にした——（労働する諸個人と諸個人の結合体または結合された全体労働者との）相互関係の客観的基礎」が形成される。この点のはのちにたちかえてみるが、「この関係に立つ人間」のうちにこそ、「生活意識」、すなわち「まずその組織意識、さらには所有意識の点で飛躍的な転換をとげる客観的基礎」が与えられていて、この「生活意識」の転換のうちににおいてこそ、「革命的団結へと前進する決定的な契機とその条件」が与えられ、したがってまた「人間変革」の核心的内容と「未来社会」の主体＝「自由な社会的個人」のあり方が示され、あるいは予示されるのである。(pp. 149, 170, 240-1)

だがこれらは、「ただ労働過程を、資本がもたらした変化した姿態において、しかも資本と賃労働との関係を捨象してみたかぎりでの論理的に抽象的な——歴史的には、必要な変革をまっぴらしてはじめてその全体性における偉大な現実となるいわば潜勢的な——『事実』にすぎない。」現実、資本主義的工場制度にあっては、あの「逆転」「疎外」「主客顛倒」が「絶対的なもの」となり、したがってまた、あの「結合さ

れた全体労働者」は「戯画化された」「凌辱された」姿をとるのである。すなわち、「生産の『事實的』主体としてのあの『結合された全体労働者』の姿は、全運動が労働者からでなく『資本の〔無意志・無抵抗の〕物質的存在様式』たる機械の自動装置（『資本としては自動装置は資本家のなかに意識と意志とをもつ』）からはじまる工場にあっては、全く見る影もなくなる。ここでは、労働者は、自分の運動を自動装置の一樣な連続運動に合わせることを強制され、『主体』たる自動装置によって『使役』されるたんなる機械の付属物として、『客体』化されている。ここでの協業は、ただ、『一つの体系』をなす自動装置を構成する『多様な・同時に動く・結合された諸機械』のあいだへ、資本家の手で配分され付属せられた各種の労働者群——（中略）——からなる集合体による、資本の指揮下で資本の目的にあわせて自動装置の運動に従属して遂行される『共同労働』、でしかない。」「労働の自動装置への、工場全体への、それゆえまた資本への隷属が『絶望的』で絶対的であるのと同様、あの『主客顛倒』・『敵対関係』も「絶対的」である。「労働にたいする資本の指揮権の専制が確立される。」(pp. 223-6, 236)

「労働の社会化」はただ労働者の「貧困化——従属、抑圧、搾取の強化——としてしか進行することができない」、これが資本主義的生産における「顛倒」が労働者にとってのもつ意味である。「社会的労働の生産力を高めるための方法」はすべて、「個々の労働者」を「犠牲」にする＝「貧困化の手段」となり、大工業のもとにあって、「労働者の労働力そのものの荒廃」に結果する。「労働者の不具化・部分人間化」、「労働者の機械の付属物化」とそれにとまなう「労働の苦痛による労働の内容の破壊」、「労働者からの労働過程の精神的諸力の疎外」、「作業時における労働者の生活条件」＝「労働の一般的諸条件」すなわち「空間や空気や光線の組織的強奪」＝「破壊」および「人体保護手段の強奪」、「労働の強化」、「生活時間の労働時間化」

「労働日の延長」「限外労働」,「資本の直接支配下への労働者の全家族の編入」=婦人・児童の雇用,それによる「労働力の減価」さらに「労働力の種属的再生産の萎縮」,等々である(pp.152-3)。

「労働する諸個人」が資本に「自発的」に売り渡した時間は、かれにとってちっとも自由でない時間であった。資本の専制に人格的にも隷属する生活＝労働時間であった。かれの労働が生産するものが大きくなればなるほど、かれを抑圧する力は大きくなり、ついにはかれとかれの家族の人間自然力そのものまで萎縮・荒廃させてしまうものであった。「それ自身が新しい生産力の担い手であり『事実に』主体であるあの『結合された全体労働者・社会的労働体』の、『それ自体としてみた労働過程』でとる姿と、それが生産過程でとる資本主義的生産関係の規定性によって戯画化され顛倒された見る影もない現実の姿とのあいだの、気の遠くなるような懸隔」。「これら二つの事実の対立的な関係」のうちにこそ、労働者の不満・憤激の最奥の源泉と、「労働する諸個人」の「最終的解放」へと向かう団結の最奥の基礎がある。(pp.236)

だがここにも団結を解体する「機構」がある。「資本主義的生産様式は、それ自体のなかに、労働者を相互競争につなぎとめかれらの団結を不断に解体させる客体的諸条件と主観的諸契機とを、たえず生産し再生産する機構を内包している。」すでにみた労働力商品の売買とそこでの「普通の意識」としての「自由な労働力所有」の「幻想」、これが「最初の環」であった。ここでの、「第二の環」としてのそれは、「労働力の価値および価格の労賃への転形」とそれにみあう「勤労にもとづく所有の幻想」である。(pp.118-20,146,177-80,238)

「労働する諸個人」は個人的消費資料にありつく唯一残された手段として労働力を貨幣と交換に売り払った。だがこの労働力商品の対価は、かれが資本のもとで強制される労働をおこなったのちに支払われる。「賃金は労働の価格として、すなわち一定量の労働に支払われる一定量

の貨幣として、現れる」、つまり労賃に転化する。(pp.177,238)

労賃にあっては、「必要労働と剰余労働との区別の痕跡は消し去られて、労働は全部的に支払労働として現れる。」したがって「資本による賃労働の搾取関係」は、「資本家と労働者との階級関係」は姿を消してしまい、『汝が与えるために我は与える、汝が与えるために我はなす、汝がなすために我はなす』という、「資本家と労働者とのあいだの、『資本と労働』とのギブ・アンド・テイクに立つ一つの協同関係という仮象」が現れる。ここでまたあの「労働者の自己の労働能力にたいする私的所有幻想」が強まる。「個々の労働者にとって、かれの個人的消費生活を左右するのは労賃である」。したがって、「自己の『生活』がかれのなした労働の量またはそれをなしうるかれの労働能力に規定されている」という「虚偽の意識」が生まれ、それが「自己の労働能力にたいするかれの私的所有意識」を強めるのである。(pp.118-20,178)

しかもその「虚偽意識」は「労働する諸個人」を、「資本によってたやすく競争—生活のための、よりはげしく、より長時間労働するための、競争—to組織される孤立した私人」とする。実際、出来高賃金と時間賃金の労働競争のなかでは、『労働者が自分の労働力をできるだけ強く緊張させること』は、『労働者の個人的利益』であり、『労働日を延長することも労働者の個人的利益である』。だがこの「個人的利益」の追求は、資本の意志・目的をより早くより確実により大きく実現するための、労働者の「自主的」装いをとった「労働競争」にはほかならないのである。そこでのかれは、「与えられた基準（最高の基準は資本の『収益』である）にてらして、この基準を自己の目標におきかえ、他人との競争のなかで、その達成のための手段の合理性を最大限に発揮することに、『職能』所有者としての自己の自立と個性と威信とを自負する個人」となる。そうしたかれにとっては、「手段の合理性とうらはらに、基準そのものの

合理性を問うことを禁じられているがゆえに、自己の内面を非合理性に明け渡さざるをえ」ず、したがって実は、「競争においてかれが依拠しているのが、『職能』でさえなくて、非合理的な心情そのもの（ヤル気、根性等々）となっている」のである。「労働する諸個人」における、「観念におけるブルジョア個人主義への従属であり、この個人主義の不可避な双生児たるブルジョア合理主義と非合理主義とへの屈服であり、実践の場におろされたプラグマティズムの信奉である。」かれが労働＝生活する場が資本の運動のうちであることから、かれの「ブルジョア的個人」としての世界は二乗化される。資本そのものが、あの「私的所有と自然発生的社会的分業」の無政府的な「商品と貨幣」の世界で競争・闘争・孤立する「ブルジョア」そのものである。かかれはまさにこの資本の「プラグマティズム」の体现者としての「ブルジョアの個人」でもある。(pp. 128-9, 178-80, 238, 244)

だが「労賃幻想」に駆り立てられた「労働競争」による「個人的利益の追求」は、「全般的な労働条件の悪化と労賃の平均水準そのものの低下とによってのみ購われ、それはそれで結局はかれの個人的利益をもそこなうものとして反作用する。」そこに「労賃幻想」が克服される契機が用意されている。(p. 120)

4 賤しめられた個人的消費手段の購入と消費、賃金奴隷としての再生産

さて、「労働する諸個人」はともかくも労賃形態をとる貨幣を手にすることができた。かれとかれの家族はこの貨幣を持って市場にでかけ、自分たちの消費資料を購買する。こうしてはじめて生活手段を入手し、それを消費して生命を維持し再生産することができるのである。(pp. 208-9, 210)

かれは「流通表面」に再び登場して、「商品形態」をとる生活手段の前に立つのであるが、こんどは「商品の売り手」たる資本家に「対等の買い手たる貨幣所有者」として相対する。ま

たかれは「消費の自立した中心」として現れる。そのかぎりでは、「生活手段の自由な買い手であり所有者であり消費者であるかのようにみえる。」「流通表面」でおこなわれる労働力の売買の過程が、あの「自由・対等・所有の仮象」を生みだし、「労働する諸個人を競争に組織する」「最初の環」であるとするならば、ここでの「労賃による生活手段の購入と個人的消費との過程」は「いま一つの環」である。そしてこの二つの環をしたがって「二つの仮象」を結ぶ「媒介となる環」が、「直接的生産過程における不払労働の搾取を隠蔽する労働力の対価の労賃形態」、つまり「労賃幻想」である。「自己の私的所有物（労働能力）をたよりとした労働（労賃）にもとづく生活手段の私的所有と私的消費、という虚偽意識の連鎖である。」(pp. 146-8, 179-80, 238)

だが、「労働する諸個人」の生活手段の購入と個人的消費は、過程を連続したものとして、社会的立場からみれば、資本の生産過程の、また再生産過程の契機にはかならないのである。

「労働する諸個人」が購入するのは資本の商品としての生活手段である。だがそれは、ほかでもないかれの労働の生産物であった。「資本家階級は労働者階級に、後者によって生産されて前者によって取得される生産物の一部分を指示する証文を、絶えず貨幣形態で与える。この証文を労働者は同様に絶えず資本家に返し、これによって、かれ自身の生産物のうちかれ自身のものになる部分を資本家階級から引き取る」(大月書店版『資本論』第一巻、原書593頁)のである。過程を資本の運動においてみれば、商品形態にある資本の一部分の貨幣形態への形態変換であり、前貸しされた可変資本の資本家への還流である。なんのことはない、労働者自身が生産した生活手段財源が可変資本とう資本主義的形態をとおしてかれにより買い戻され、「人身を買う手段」たる生活手段が貨幣形態に変態して資本のもとに還流するのである。(pp. 146, 208-10, 228, 274)

この過程は資本の商品が価値を実現する過程

である。ところで資本にとれば、「生産物が商品として『売れていさえすれば』、つまり価値（剰余価値）が実現されていさえすれば、『万事が正常に進行する』」のであって、それが消費によって『生産物として実証される』か否かは、さし当りどうでもよい」のである。資本主義的生産＝生活過程における「労働する諸個人」の生活手段の消費にあつては、必要な変革が遂げられたのちの未来社会にみることができる、「生産と消費とのあいだの媒介運動」はなく、それは「個人的には純然たる私事」として過程から最終的に脱落する。しかもそれは「労賃が許す範囲」で「取得」しうる生活手段の消費であつて、「ただ労働力商品所有者としてのみずからの肉体的生存（生および種）を維持し再生産するにすぎない」ものである。つまり、「純然たる私事、たんなる消過の一契機、『賃金奴隷制』の『見えない糸』としての、陰惨で貶められた屈辱にみちた」、「資本主義的生産様式のもとにおける」、労働する個人の「個人的消費」である。（pp. 147, 228-9, 274, 280, 304, 329）

とはいえ「労働者階級の個人的消費自体が、資本の再生産過程の」、「不可欠の一契機である」。「それは、『一方では、かれら自身の維持と再生産とが行なわれるようにし、他方では、生活手段をなくしてしまうことによってかれらが絶えず繰り返し労働市場に現れるようにする』」からである。『ローマの奴隷は鎖によって、賃金労働者は見えない糸によって、その所有者につながれている。賃金労働者の独立という見せかけは、個々の雇主の不断の交替と、契約の擬制によって維持されている』にすぎない。」「労働者階級の労働力の総体にたいする資本家階級の所有権」である。（pp. 147, 228-9, 232, 274, 329）

この「労働者階級の『総労働力にたいする資本の所有権』を「いっそう完全なものに」し、「資本の指揮権の専制に、社会的仕上げを加える」のが、「産業予備軍の形成と増大、それによる労働者相互の競争の激化である。」（pp. 153, 181, 232, 234, 238）つまり、「相対的過剰人口の

不断の生産は労働の需要供給の法則を、したがってまた労賃を、資本の増殖欲求に適合する軌道内に保ち、経済的諸関係の無言の強制は労働者にたいする資本家の支配を確定する。（中略）（こうして資本主義的）生産様式の諸要求を自明な自然法則として認める労働者階級が発展してくる」のである。（『資本論』第一巻、原書963頁）

以上が著者によって明らかにされた、資本主義社会における「労働する諸個人」の意識の生産も含む生活過程の基本的内容である。就中、かれが「偶然的個人」として不断に再生産される諸契機である。だがそこにまた、「自由な社会的個人」への飛躍＝人間変革の諸契機も指示されているのである。

V 「自由な社会的個人」と「社会的生産＝生活過程の《人間化》」

1 生活意識の転換＝人間変革と

「自由な社会的個人」

著者は、資本主義的生産＝生活様式の発展のうちにこそ、就中、「資本の独自の生産力」＝「大規模な協業と共同的生産手段とくに機械の使用に示される労働の社会的生産力」の展開の場である「直接に社会化された労働過程」それ自体のうちにこそ、未来社会の形成要素と変革の諸契機が準備されることを明らかにしている。「労働する諸個人」の「普通的生活意識」の転換、つまり「偶然的個人」から「自由の主体としての個人」＝「自由な社会的個人」への「人間変革」の諸契機に焦点をあてて、この点を見ることがしよう。

著者は、資本主義的生産＝生活様式が指示する、「自由の主体としての個人」の「自由の条件」の三つの鍵を明らかにしている。第一は、「共同の生産手段で労働し個人的諸労働力を自ら自覚的に一つの社会的労働力として支出すること、すなわち私的所有と結びついた社会的分業の自然発生性による被制約を打破しそこから脱却すること」である。これは、「ばらばらの私的諸労働の社会的依存を基礎とした商品生産

社会」における「偶然的個人」としての個人のあり方にてらして指示される条件である。(p. 163)

第二は、「標準労働日のための闘争」とその制定である。「標準労働日のための闘争は、労働力の売手としての労働者の個人的権利の延長上に生じるものであって、それ自体としてはまだ決して、商品生産社会の一般的諸条件を超えるものではない。」しかし、この「闘争における、労働者の階級への結集は」、「いわば経済的階級から労働者それ自体にとっての階級への、端緒的な一步」ではあるが、「労働者が、文字通り『偶然的個人』、商品所有者個人から出発して踏み出す、団結への巨大な一步」をするものである。しかも標準労働日の制定は、「労働者階級の自覚的形成にとって、決定的な意義をもつ一步」でもある。つまり『「労働者が売り渡す時間」と『かれ自身のものである時間』との別』により、「かれらがみずからの人間変革を現実化していくための、前提となる時間の確保を意味する」するからである。さらにそれは、「労働日の短縮の絶対的限界」としての「労働の普遍性」がその扉に記されている、未来社会の「門へとつうじる道の画期的な出発点」でもある。(pp. 167-9)

第三は、「資本の独自の生産力」の展開の場である「直接に社会化された労働過程」それ自体のうちに『事實的』に形成される、あの「結合された全体労働者または社会的労働体」である。それ自体として見たこの「結合された全体労働者」は、第一の鍵の「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体」にたいして、「決定的な差異——一つの社会変革を予定する差異」をもつと同時に、「いわばぴったりと接近している」。(pp. 170, 172)

これが著者が明らかにした三つの鍵であるが、「自由な社会的個人」への人間変革の、したがってまたそこに向けての飛躍＝革命を準備し遂行する主体の形成にとって、もっとも重要な

鍵は第三のそれである。いかなる意味でそうなのか。

著者は、第二の鍵としての標準労働日のための闘争とその制定が、労働者階級の自覚的形成にとってもつ決定的に重要な意義を明らかにしている。と同時に、この闘争それ自体は、賃金をめぐる闘争もまた、「労働力商品所有者としての労働者の個人的権利を基礎とした労働力の販売諸条件の改善をめざす」ものであって、「商品生産社会の一般的諸条件を超えるものではない」、したがって『「普通の意識』の別の延長線上にある』ものと指摘している。(p. 240)

ではこの「普通の意識」を超える諸契機はどこで与えられるのか。「結合された全体労働者」の「事實的」形成のうちに、これが著者の答えである。それはこうである。

「それ自身が新しい生産力の担い手であり『事實的』主体であるあの『結合された全体労働者・社会的労働体』の、『それ自体としてみた労働過程』でとる姿と、それが生産過程でとる資本主義的生産関係の規定性によって戯画化され顛倒された見る影もない現実の姿とのあいだの、気の遠くなるような懸隔」、ここに、すなわちこの「両者の懸隔を超えようとする傾向とそれを維持・強化する傾向との対立」のなかに、「生産力と生産関係との衝突」と、「上昇する生産力の『事實的』担い手たる労働者とそのいっさいの成果を横奪する資本家とのあいだの階級敵対を激化させる客体的諸条件の成熟」、この資本主義社会の「変革の客体的な二大契機」の「結節点」があり、その二大契機がそこで「一つに統合されている」。だが「これらの諸条件は、変革の客体的な必然性を指示するもので、「ここからやにわに現実の変革に飛躍することはできない」。問題は主体的条件であり、鍵は団結にある」。(pp. 235-8)

すでにみたように「資本主義的生産様式は、それ自体のなかに、労働者を相互競争につなぎとめかれらの団結を不断に解体させる客体的諸条件と主観的諸契機とを、たえず生産し再生産する機構を内包している」。と同時に、「それ自

身の機構の不断の不可避の結果として、労働者の相互競争の停止すなわち団結の客体的諸条件と一定の範囲内での主体的諸契機とを、それ自体のうちに内包している。」賃金や労働時間やその他もろもろの労働諸条件についての不満や憤懣が不断に醸成され、これらの諸条件の改善のための闘争と団結が、「絶えず打ち砕かれ」ながらも、くりかえし余儀なくされる。この団結はさきにみたように、「それ自体としては、まだ資本主義的生産様式の枠内にとどまっている。」だが、労働者はこの団結においてこそ、「結合された全体労働者」の「資本主義的に顛倒させられた姿の下に隠された真の生産の主体としてのみずからの力と歴史的地位とを自覚する可能性を与えられる」のである。(pp. 238－9, 244－5)

すなわち、「共同的労働過程に対応した個人と結合体との新たな相互依存関係を組織原則とし、その成員による労働の社会的管理機能の『事實的』掌握を含み、巨大な共同的労働手段（機械体系）の利用による大規模な共同労働（協業）を遂行する結合された全体労働者、そうすることによってたんなる個人能力の集合を超えた結合された社会的労働の生産力を発揮し、労働生産物を社会的結合労働の生産物として生産し、なおまた、大工業の技術的基礎の革命性から不可避な労働機能の流動と多面的転換とを通じて人間労働の総体性の回復―骨化された分業の止揚―と、労働する諸個人の人間としての全体的発展との、可能性と必然性とをうちにはらんだ結合体、こうしたものとしての『社会的労働体』の能動的成員としての自覚」とその可能性である。(p. 240)

この自覚と『『事實的』に形成されているこの『社会的労働体』』とのなかには、「労働諸個人の生活意識の決定的な転換の、したがってまたかれらの人間変革」の、「主体的諸契機」と「客体的諸条件」とが与えられているのである。「諸個人の所有意識」＝「所有と労働との関連についての意識」は、「これ（孤立した労働者の擬似小生産者の所有意識）と全く無縁な、

集団の労働の能動的成員としての自覚において、共同労働を遂行する『社会的労働体』による、共同の生産手段の所有と、それにもとづく結合労働の生産物の取得との、可能性および必然性の洞察にたつ意識へと転化していく。」また「この『社会的結合体』の構成原理」は、「一方では、労働する諸個人なしには結合体はありえないが、他方では、ただこの結合体の成員としての共同労働においてのみ、諸個人はその個人的限界を超えた種属能力を発揮しうる」という、「個人と結合体との新たな相互依存関係」であって、「この関係に自覚的にたつことにおいて」、かれらの「自他の関係がいかにあるべきかについての意識」＝「社会意識（組織意識）」は、「競争によって孤立し資本への隷属と無知とのなかでいきづくブルジョア個人主義の社会意識とは、全く対極的なものに一変していく。」(pp. 163－4, 241)

「諸個人の生活意識の変革」は、「未来の結合体の先どり」としての「革命的団結」の「前提であるだけでなく、むしろ『革命実践』をとおして、そしてなによりも『革命そのもの』において遂行される。」(pp. 241－2)

「とはいえ、『革命的団結』は、自然発生的には十全なものにまで生成することはできない。」それは、「諸個人の生活意識の根底的変革を要請するが、その必須の契機の一つは、労働者のおかれた客観的諸条件とかれらの歴史的地位とのトータルな自覚すなわち科学的認識であ」り、「必要なのは、『科学』と労働運動との結合である。」(p. 242)

かくして、「労働する諸個人は、みずからを変革された意識をもつ諸個人の結合体としての革命的階級に形成することによってのみ、必要な変革、すなわち『資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式、したがってまた資本主義的私的所有』の根底的廃絶を遂行することができる。」また「かれらは、この変革を介してはじめて資本主義的生産に特有の『主客顛倒』によって見る影もなく貶められてきたみずからの『社会的労働体』を、社会の全面にわた

るあの『自由な人びとの結合体』へと転化させることができる。」この時また、「労働する諸個人」は「『二重の意味』で『自由な労働する諸個人』に転化する」。すなわち、「外的な物的強力への隷属から解放され」ることと、「『賃金奴隷』としての『見えない糸』からとき放たれ」ることの二つの意味での自由においてである。(p. 247)

以上が著者によって明らかにされた、「生活意識」の転換に視点をすえた、「偶然的個人」から「自由の主体としての個人」への「人間変革」の諸契機である。

2 「社会的生産＝生活過程の《人間化》と「個人的所有」の再建

それでは必要な変革をとげたのちの「自由な労働する諸個人」のあり方は、かれらの「生活の仕方・様式」は、総じて未来社会はどのようなものか。著者のいう「自由な社会的個人」がそれであり、「社会的生産＝生活の《人間化》」を遂げていく運動態がそれである。これら二つをキー概念として、「労働する諸個人」の「最終的解放」の過程が追跡され描写されている。ここでは「自由な社会的個人」の労働・取得・交通・消費に、あるいは、論争的となっている、いわゆる「個人的所有」の再建に焦点をあてて、著者の理論・思想をみることにしよう。

新たな社会的生産＝生活の「全過程のすべての諸契機の主体」は、「自由な社会的個人」、すなわち「全社会をおおう単一の『結合体』に自発的に結集した自由な社会的個人」である。「労働の普遍性」がその入り口の扉に記されている未来社会では、「自由な社会的個人」は残りなく、「共同の生産手段で労働し、自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する」。ここでの「諸個人相互の交通は、直接に、なんらの媒介なしに（『物象化』の止揚）、普遍的でかつ『透明』である。」(pp. 266, 270)

「自由な社会的個人」は、「共同労働（『協業』）において生産手段を結合労働の共同の純

然たる手段（客体）として現実に行使」し、「現実的」に「支配」している。「『労働』する行為（『協業』）が同時に生産手段を『占有』する行為（共同占有）であり、生産手段を『占有』する行為がそのまま『労働』する行為なのである。」ここにはあの資本主義的「顛倒」はない。「自由な社会的個人」は、「労働力実現の客体的条件である生産手段」の「共同占有」の主体であり、労働の、生産の主体なのである。(pp. 266-70)

したがって「自由な社会的個人」は、「労働力実現の客体的諸条件」に「わがものとして関係し」、自分の「個人的労働力」を「自発的に」「自分で意識して一つの社会的労働力として支出する」ことにおいて、「労働を純粋に自己実現として遂行」する。この「自己実現」としての「共同労働を遂行することにおいて、自由な社会的個人は、かれらの身体的個体に本源的に内在的な労働力の自由な個人的所有者なのである。」(pp. 267-8, 270)

ここでは、「労働と物的・人的生産諸条件の所有との主体が同一であるだけでなく、労働が即生産諸条件の所有であり、生産諸条件の所有が即労働である。」内実のない空疎なあの「仮象としての自由な労働力所有」とはまったく違った、あるいはまた小経営＝小所有とはまったく違った、労働＝所有の世界である。(p. 270)

「自由な社会的個人」が主体である生産過程にあっては、「労働する行為が即生産諸条件を所有する行為であ」った。「それゆえ労働する行為のうちに、労働生産物を取得または取得する行為としての所有が、予定されている。」「自由な社会的個人」は、「共同労働（『活動』）を遂行することにおいて、生産手段の『共同的』所有者たるの実を示すことで、直接に、媒介なしに、共同生産物の『共同的』取得者である。」またかれらは、「共同労働のなかで『自己実現』としての労働を遂行すること（『活動の交換』）において、労働力の『個人的』所有者たるの実を示すことで、直接に、媒介なしに、共同生産物の『個人的』取得者である。」(p. 271)

しかも、「自由な社会的個人にとって、取得または取得する行為としての所有とは、直接に消費である」。なぜなら、「ここでの取得は、もはや、非労働者による価値生産物としての生産物の排他的独占の取得でもなければ、それをふたたび交換するための取得でもなく、「それはただ、取得者にとって物が『直接に役に立つこと』（物の有用性に対応したかれ自身による物の現実的支配）においてしか取得としての実をもちえない取得、すなわち直接に消費としての取得でしかありえない」からである。（pp. 271-2）

したがって、「労働生産物の『共同的』『個人的』取得様式は、生産が供給する労働生産物の特定の消費対象性に規定された消費の仕方によって、より具体的な形態規定を受け取る。すなわち、自由な社会的個人による生産手段の共同的取得＝生産的消費と、かれらによる生活手段の個人的取得＝消費、とである。」（p. 277）

「自由な社会的個人」による消費とりわけ個人的消費（本来的消費）は、あの「陰惨で貶められた屈辱にみちた」、資本主義的生産様式のもとにおける個人的消費と対比して、「量的にも質的にも全く別の、いわば変革された生活手段の消費」となる。すなわち「自由な社会的個人自身の社会的労働の生産力が許容しかつかれらの個性の十分な発展が要求する範囲にまで拡張された生活手段」の、かれら自身による個人的消費である。したがってこうした「個人的消費は、自由な社会的個人それ自身を、より高度な享受能力をもつ消費主体として生産すると同時に、より高められた諸能力をしたがってまた人間としてより全体的に発展した素質をもつ生産の主体として生産する。」（pp. 272-3, 280, 329）

ここ「自由な社会的個人」の個人的消費にあっては、著者が発見した、マルクスの『経済学批判』への序説における、「生産と消費とりわけ両者の『媒介運動』にかんする一般的・基礎的諸規定」、就中、「消費は生産である」との規定が甦ってくる。（p. 272）

「自由な社会的個人の労働生産物は、かれらによる消費（享受）によってはじめて、生産する主体たるかれら自身にとっての生産になる。」消費は「『生産物に仕上げのひとはけをくわえる』ものとして、社会的生産＝生活過程の不可欠な最終の一環をなし」ているのである。これが第一。（pp. 274, 280）

第二に、「変革された消費」は、「新たな『生産の対象を、内的な像として、欲望として、目的として、観念的に定立』することによって、生産を媒介する。」なぜか。「自由な社会的個人」による消費は、かれらの「個性の十分な発展」、「人間としての全体的発展の物質的基礎としての、生産的・個人的消費対象にたいするかれらの欲望を生み出し発展させる。」と同時にこの発展する「欲望が、かれらの共同欲望として、直接に、かれら自身が主体として担う社会化された生産の、共同的目的となり推進的動機となる」からである。つまり「消費は生産を二重に生産する」のである。（pp. 272-5, 280, 329）

だがここでの消費が生産であることの決定的に重要な契機は、それが生産の主体を生産することである。すなわち、「変革された消費」は「自由な社会的個人それ自身を、より高度な享受能力をもつ消費主体として生産すると同時に、より高められた諸能力をしたがってまた人間としてより全体的に発展した素質をもつ生産の主体として生産する」ことである。（p. 280）

この契機はつまるところ、必要な前提条件が成熟し、ある「臨界点」を超えたのちには、「最高・最大の生産力たる全体的に発展した諸能力をもつ主体としての」、「自由な社会的個人」自身を生産するものとしての、「生活（享受）手段の消費（享受）」とそれとともに展開される「高度な諸活動」となる。必要な前提条件、ある「臨界点」とは、「運動態」としての「社会的生産＝生活過程」が《人間化》をはるかに遂げていくなかで、変革によって獲得された「自由に処分できる時間の拡大」の条件がますますひろがり、その時間に「自由な社会的個人」が遂行する活動自体が、「かれらの人間的

諸能力の発展の追求であると同時に、社会的労働の一般的生産力の発展であり、生産過程の絶えざる科学的変換の源泉」となるにつれて、ある「臨界点」、すなわち「富の直接的生産過程の科学化が、特定の臨界点を超え、人間の直接的労働時間に代って自由に処分できる時間それ自体が、社会の最大の生産力」となる、そういう条件の成熟と「臨界点」である。そこでは、直接的生産過程の労働は「真に自由な」「魅力的な労働」になるとともに、その労働時間はさらにゼロに近づいていく。つまりここは、『『真の自由の国』の『花開く』圏域にほかならず、『社会的生産＝生活過程』が「総体性にまで《人間化》された」世界である。(pp. 289-91, 302, 305, 307, 313, 316, 320, 323-7)

「消費の仕方」が「労働生産物の対象性」により「規定され」ることはすでにみた。生産手段は「社会的労働体」により生産的に、生活手段は「自由な社会的個人」により個人的に消費される。この「消費の仕方はまた」、労働生産物の『個人的』・『共同的』取得に、取得する行為としての所有の具体的な形態規定を与える。」「自由な社会的個人」による生活手段の個人的消費は、かれらを「不断により高められた享受能力と諸能力とをもつ消費および生産の主体として生産するだけでなく、かれらの社会的欲望をたえず生み出し拡大させることによって、人間の全体的発展そのものを生産の共同的目的・動機たらしめ、生産の計画的制御を規定する」ものであった。この「生活手段の個人的消費」を「労働生産物を取得する行為としての所有の形態で表現したもの」、これが「自由な社会的個人による生活手段の『個人的所有』」である。「生産手段の生産的消費」を「労働生産物を取得する行為としての所有の形態で」表現したものの、これが、「労働主体たる自由な社会的個人による、生産手段の『共同占有』」である。(p. 281)

「生産諸条件の分配＝所有関係」が前提となり、「労働生産物の取得＝所有関係」が「結果」であった。こんどは、この結果が前提となる。

すなわち、「自由な社会的個人は、取得の結果として、かれらの労働力の主体的実現条件たる生活手段の現実の『個人的所有』者」となる。また同時に「(労働力の)客体的実現条件たる生産手段の潜勢的な『共同占有』者となる。それによって「自由な社会的個人」は、「かれら自身の労働力の潜勢的な個人的所有者となる。」(p. 281)

「自由な社会的個人」は、「生産の人的条件たるこの労働力の潜勢的な個人的所有者として現実に共同労働を遂行するなかで」、労働力の「現実的所有者たるの実を示す」。またそのことにおいて、かれらは「現実に共同的生産の主体となり、客体たる生産の物的諸条件である生産手段の現実的『共同占有』者となる。」(pp. 281-2)

確認してほしい。マルクスのあの「個人的所有」の「再建」に関して著者が獲得した結論は、「生活手段の『個人的所有』」であるということ。だがそれは決してあの「仮象としての生活手段の自由な所有」でなく、また「純然たる私事、たんなる消過の一契機」としての「陰惨で貶められた屈辱にみちたかの個人的消費」でない。「自由な社会的個人」による「共同的生産手段」の「現実的支配」＝「共同占有」＝「共同的取得」＝「生産的消費」としての「共同的生産」が、すなわち「人間の全体的発展それ自体を直接的目的・規定的動機とし、共同の社会的欲望に対応して意識的・計画的・合理的に制御された、共同生産が、過程の現実的出発点であり、包括的契機」とするなら、「自由な社会的個人による生活手段の取得すなわち『個人的所有』とその個人的消費」は、「自由な社会的個人それ自身の、より高められた享受能力と諸能力、それゆえより全体的に発展した素質をもつ主体としての生産」として、「過程の総括的契機」となる。こうしたものとしての「生活手段の『個人的所有』」である。(pp. 283, 329)

しかもこの「総括的契機」としての「生活手段の『個人的所有』」は、すでにみたように、あの「臨界点」を超えた、「その総体性にまで

《人間化》された社会的生産＝生活過程」にあって、「最高・最大の生産的消費—全体的に発展していく『人間の力』そのものの生産手段—の、過程の主体であり、過程のなかで真に自己を実現する活動（真に自由な労働）の実践者である、諸個人自身による『所有』（取得即享受としての所有すなわち占有）という、高度な規定性を受けとる。」したがってまたそれは、「最高・最大の生産力たる」主体、つまり「自由な社会的個人」そのものを生産するものとして、「《人間化》された総過程の、支配的で最も規定的でもっとも生産的な契機なのである。」「自由な社会的個人による享受手段（生活手段）の『個人的所有』の発展とは、かれらの人間としての全体的発展そのものの、直接的な物質的基礎の側面からする、別の表現以外のなにものでもない」ということである。（pp. 303, 313—4, 325—6, 329）

ところで「個人的所有の再建」に関する著者のもう一つの重要な論点は、「生活手段の『個人的所有』」を別の視角からとらえた契機としての、「労働力の個人的所有」である。すでにみたように、生活手段は、「自由な社会的個人」の「労働力の主体的実現条件」であった。これの現実的「個人的所有」は、かれらを「かれら自身の労働力の潜勢的な個人的所有者」とした。この「労働力の潜勢的な個人的所有」は、かれらが「現実共同労働を遂行する」ことにおいて「現実的」なものとなった。つまり、「かつて自由な『小経営的生産様式』に内在的な一条件として歴史的孤立的に散在し、資本主義的生産様式のもとで形骸化されてきた、かの自己の労働力にたいする自由な本源的所有」の「回復」である。「もちろん、それが『小経営的生産様式』におけるその単純な再現でありえないこと、いうまでもない。」（pp. 281, 316）

だがこの「自己の労働力にたいする自由な本源的所有」の「回復」は、「旧社会」から「新社会」への飛躍においては、さしあたり、「ようやく」にして獲得されるものであり、「社会的生産＝生活過程の《人間化》の進展に即応し

て」、「その内実における生成・発展の過程をもつ」。すなわち「生活手段」の、したがってまた「労働力」の「個人的所有の歴史性」である。最後に、この点に関する著者の理論・思想をみておきたい。ただし、あの「臨界点」、かの《人間化》がそれを超えて総体性にまで発展する「臨界点」にすでに触れているので、ここでは大筋だけ確認したい。（pp. 314, 316）

「新社会（＝『共産主義社会』）の『最初の段階』には、労働する諸個人の自己の労働力と生活手段とにたいする私的所有意識は、資本主義時代に比べて、さしあたり、弱まるのではなくむしろ強まる可能性がある」。なぜか。（p. 318）

「新社会」ではあっても、いまだ「現実的富の創造が、労働過程の客体的諸作用因の力に大きく依存してはいるが充用される労働量との比例関係をなお多かれ少なかれ保っているような生産力の水準」であるばあいには、したがってあの「臨界点」をいまだ超えていないばあいには、「労働する個人にとって主観的にも客観的にも当為としての生活手段の分配様式は」、「かれが、社会的な共同労働の過程で」、「『わがもの』としてのかれの労働の一定量を社会に給付することによって創造する果実を、生活手段の形態で、社会的に可能なかぎり余すところなく『わがもの』として取得する」、こういうものでしかありえない。だからここでは、「労働する個人」は、「『かれが社会に与えたのと正確に同じだけのものを（中略）返してもらう』」という、「『商品交換が等価物の交換であるかぎり』でこの交換を規制するのと同じ原則が支配している」ことによって、多かれ少なかれ自己の労働力の自由な私的所有として観念される可能性をもつ」のである。しかも、ここでは、「自己の労働力の自由な本源的所有」が、「資本主義的形骸化から脱却して自由な労働力所有の内実を回復していることによって、また長い苦闘のすえにいまようやくそれを回復したばかりであることによってなおさら」、そのように「観念される可能性をもつ」こととなる。（pp. 316—7）

「自由な社会的個人による『個人的所有』は、

こんなに幾重にも制約されたそれから出発して、発展・成熟の長い真に人間的苦闘にみちた過程を辿」ってのちに、あの「臨界点」を超えることによって、したがってまた「私的所有の観念とその発生基盤」を「完全に一掃し超克しお」えることによって、「その本来的に占有としての性格を、全面的に顕在化させ」るのである。すなわち「自由な社会的個人」が「生活手段の現実的享受を通じて、みずからを現実人間として全体的に発展させていくかぎりにおいて意味をもつ」、そういうものとしての「生活（享受）手段の『個人的所有』」の「顕在化」である。また「自由な社会的個人」による、「社会的で科学的で一般的な性格をもつ諸労働（諸活動）を、その能力に可能なかぎりの真剣さと努力とをもって、かれが現実遂行するかぎりでその実を示すことができる、自己の人間的能力の本源的占有」としての、「労働力の個人的所有」の「顕在化」である。（pp. 321, 328）

おわりに

本書『経済学と歴史変革』はまことに大著と呼ぶにふさわしい。世紀転換を間近に控える20世紀末の資本主義の現実を凝視しながら、マルクスによって獲得された、あるいはマルクスによってはその諸断片しか残されなかった人間解放の理論と思想の核心を残りなく甦らせ、「資本主義の生産＝生活様式」の過去・現在・未来を、したがってまた、「労働する諸個人」の「観念・表象・意識の生産過程」をも含めた「人間の物質的・精神的生活の仕方・様式」の総体、つまり「生きて活動する諸個人としての生きざま」の過去と現在とそしてかれらの「最終的解放」にむけての未来を、一冊のうちにみごとにまで凝縮して体系化している。

本書はその意味で単なるいわゆるマルクス解釈ではない。著者尾崎さんによる、20世紀末の現実のうちにより一層鮮やかに、より一層深刻に展開する、いわばマルクスの世界とってよいものの発見・再構成である。就中、「自由な社会的個人」がそのあらゆる諸契機の主体であ

り、かれら自身がそれを体現する「運動態」としての未来社会を、許されるぎりぎりの範囲まで理論的に解明して体系的に叙述していること、これは尾崎さんの独自の生産物である。いや、20世紀末の現実と格闘する著者にあってはじめて体系的に獲得された理論・思想とってよい。

本書に描かれている世界は、そこに展開される人間解放の理論と思想は、日本における資本主義発展と、そのいわば「近代化」過程に生じてきた思想——著者が最良のジャパニーズ・イデオロギーと評価する大塚史学＝類型論的比較経済史、あるいはそのうえに盛行する市民的マルクス理解・市民的社会主義論——との格闘・超克のなかで獲得されてきたものである。したがって本書は日本の現実と思想の批判のうちより生まれてきたという意味で独自の産物である。しかもそれは、経済学の、つまり一般理論の陶冶として、今では世界の資本主義のいわば最先端を走っているともいってよい日本資本主義の現実を念頭にしながら果たされているのである。

本書が提示する世界は、日々労働する個人の息づかいから社会の全面をおおう人びとの生産＝生活過程の総体におよび、しかもその過去・現在・未来にわたるものである。書評をめざしながらそうならず、本「小論」が小ならぬ大部な紹介文的なものとなったのは、本書に示される、長きにわたる理論的・思想的格闘の深みから獲得された、著者の到達した世界の広さ・大きさと確信の深さを、筆者なりに著者のあとを追って可能なかぎりわがものにしようとしたからである。とはいえ、本「小論」は、その広さと深さにおいて道半ばと自覚している。いや、著者の描いている世界、著者が獲得した理論と思想を曲げてとらえているかもしれない。著者の海容を乞うとともに、読者が本書それ自体を通して著者と対話されることを切望する。本「小論」が、読者によるそうした対話になにほどか役立てば望外のよろこびである。

（青木書店、1990年）

（1991年3月脱稿）